

OKoTaC 通信

オコタック

2019年2月13日発行

NO.43



- P 2-3 NPO活動報告(1) 外国にルーツをもつ子どもの教育支援シンポジウム
『外国にルーツをもつ × 特別な配慮が必要な子ども』
- P 3 『外国人家族のための高校進学説明・相談会』
『ともに生きるシンポ～多民族社会日本のこれから～Part2』
『フィンランドの移民受け入れ ～これから日本が歩む道をさぐる～』
- P 4 NPO 活動報告(2)
『多文化にふれる えほんのひろば 2018』
- P 5 オコタック、ふたつのグランプリ受賞！
- P 6 Air Mail メキシコ便り ④ 『グアテマラでピストル強盗に遭遇！』
- P 7 特別寄稿『カリフォルニア州における言語的にマイノリティーな高校生への支援』
- P 8 オコタックからのお知らせ



おおさかこども多文化センター 活動報告(1)



外国にルーツをもつ子どもの教育支援シンポジウム

『外国にルーツをもつ × 特別な配慮が必要な子ども』

学校現場や地域の教室で、発達障がい疑いがある外国にルーツをもつ子どもをめぐる、教員・支援者の戸惑いの声を耳にする機会が増えています。オコタックでは昨年 12 月9日(日)、このテーマを考える標記シンポジウムを、大阪大学中之島センターで開催しました。募集開始時点から反響は大きく、日本語指導や支援学級の教員、地域のボランティアなど、計 68 名の参加がありました。



午前中は、愛知県立大学と知立市立知立西小学校の非常勤講師である山本憲子先生に、「発達障がいとその基本的な支援のあり方を考える」と題してわかりやすく講義していただきました。特に「発達障がいの心理的疑似体験」のワークでは、参加者一人ひとりが“不器用な子、不注意・多動な子”の気持ちを身をもって体感することができ、そこから、子どもが安心できる、自信をもって頑張れるための関わり方についても、大きな気づきがありました。

午後からのパネルディスカッションでは、堺市でポルトガル語継承語教室を運営する田中ルジアさん、堺市の小中学校の日本語教室で長年指導されている浦久仁子さん、ブラジルにルーツをもつ ADHD/ASD の子どもの親で自身も当事者である水野励さんの3人が、経験に基づいた貴重なお話を聞かせてくださいました。子どもを受け入れる気持ちを常に持つこと、子どもがいろいろな人に出会う機会をつくること、その子の得意なことを見つけてほめること、その子のルーツを大事にし、必要に応じて言語以外のコミュニケーションを積極的に探ること、できること・できないことをはっきりさせるアセスメントの重要性など、それぞれの立場から、子どもに関わるうえで多くのヒントを提示くださり、非常に学びの多い一日となりました。(A.N)

.....

教育支援シンポジウムに参加して――

戎 妙子 (関西大学国際部 非常勤講師)

今回のシンポジウムは、長年教育支援に正面から取り組んでいるオコタックならではの先進的かつ画期的な企画でした。私は常々実践の語りほど説得力のあるものはないと思っていますが、今回参加した誰もが、講師の山本先生、パネラーの田中さん、浦さん、水野さんから発せられる一つひとつの言葉の力強さを感じたのではないのでしょうか。

私たちが子どもたちを全人的に捉えようとするとき、様々な側面から見る必要があります。しかし、外国にルーツを持つ子どもの場合、ともすると学校内では一部の人にその役割が集中する傾向が認められます。この状態はかねてから問題視されているにもかかわらず、なかなか改善のペースが上がっていないのが現状ではないのでしょうか。今回、浦先生が堺市で利用されているアセスメントを紹介くださいましたが、特筆すべきは、関わる人すべてが同じ土台で話すための指標を行政側が提示した点にあります。未だに外国にルーツを持つ子どもを支援する体制が調わないなか、これは貴重な一歩だと考えます。

また、いかなるルーツを持つ場合でも、特別な配慮が必要な子どもの支援にはソーシャルワークの視点が必要です。ソーシャルワークの視点とは、すべての人が安心・安全に、その人らしい自立した日常生活を、継続的に送れるようにするために、さまざまな社会資源を活用しながら達成を支えるという視点です。これはまさに「将来、子どもたちが自分の力で社会の中で生きて行くことを念頭に置いての支援を考えていきましょう」という山本先生の締めくくりの言葉に集約される考えです。



しかし、水野さんのエピソードにあったように、さまざまな社会資源の活用を、といっても、専門機関や専門家と信頼関係のもとにつながることは、残念ながら非常に難しい状態にあります。水野さんでさえ大変ご苦労をされた状況の中、言葉や文化、制度の違いから来て、子どもの発達に不安を抱いた親はどうすればいいのでしょうか。

そこで必要となるのがメンター(助言者)の存在です。田中さんが実践されていることは、まさにメンタリングそのものの

だと感じました。今回は継承語教室に通う子どもさんの支援についてのお話でしたが、田中さんの教室があることで支えられている親御さんも多いことと思います。日本語が圧倒的優位を占める社会で、継承語教室を個人で長年にわたって継続されるには、計り知れないご苦労や葛藤があるにちがひありません。そんなご苦労を想像しながら、毎回「多文化にふれるえほんのひろば」で、はにかみながらもポルトガル語で絵本を読む子どもたちの姿に一筋の希望の光を見ているのは、私だけではないと思います。またあの元気な子ども達の姿が見られる日を心待ちにしています。

2011年2月にオコタックがNPO法人としてスタートを切ってから今年で8年。今の時代、利他の精神で一つのことに信念を持って取り組み、それを維持、継続していくのは並大抵のことではないと思います。昨年12月に出入国管理法改正案が可決成立し、この国の形が大きく変わることは必至です。子どもは国の宝です。オコタックの意義ある活動をどうすれば次の世代につないでいけるか、会員の皆さんと一緒に考えていければと思います。

最後になりましたが、講師の山本先生、パネラーの皆さん、企画運営をくださったスタッフの皆さん、有意義な時間をありがとうございました。



.....

『外国人家族のための高校進学説明・相談会』

オコタックでは今回で4回目の企画になりますが、11月10日(土) 国労大阪会館にて、生徒、家族、関係者21名が集い実施されました。外国で教育を受けた保護者にとって、日本の高校入試の仕組みはほとんど理解できない状況です。そこで府内の高校の紹介、入試システム、入試問題紹介、学費などを通訳者を介して対象者にガイダンスを行い、入試に伴う相談なども受け付けました。 (Y.H)

参加者からの感想の一部

- ・入学試験の問題の紹介があり、自分の娘が受験する高校の入試問題の種類が分かった。
 - ・子どもは幼少期に来日したので、特別枠の受験資格がない。子どもは日本語が十分理解できるが、母親の私は、日本語がよくわからないので、試験科目などの高校入試の内容、内申書の意味、さらに子どもはどこ的高校に入学できるのかも、わからなかった。しかし、この説明会に来て、英語は、英検や TOEFL の資格があれば加点されることなど、いくつかについて知り、入試についてすべてわかったわけではないけれど、かなりの情報を教えてもらい、助かった。
-

子どもの夢応援ネットワーク主催『ともに生きるシンポ～多民族社会日本のこれから～Part2』

「子どもの夢応援ネットワーク」(オコタックも参加)が12月23日(日)、大阪市立敷津小学校で開催されました。世田谷区長の保坂展人さんの講演、外国にルーツをもつ当事者の若者2人と保坂さんを交えたパネルトーク、参加者によるテーブルトークと盛りだくさんで、年末にもかかわらず102名もの参加がありました。保坂さんの区長としての多文化共生を含む区政改革の方法論、当事者2人の赤裸々な体験談など、参加者には刺激的でかつ考えさせられる内容でした。また、最後のテーブルトークも時間を忘れるほど白熱した議論が各テーブルで行われていました。 (Y.H)



.....

ヒューライツ大阪共催『フィンランドの移民受け入れ ～これから日本が歩む道をさぐる～』

上記セミナーが1月19日(土)、外国につながる子どもの支援に関わる教員、研究者、支援者等35名が参加し、ヒューライツ大阪セミナー室で開催されました。講師の亀谷優子さんは日本、スウェーデン、フィンランドで社会福祉を学び、2017年まで約18年間、フィンランドに滞在され、行政、NGO等で移民、難民支援に関わられてきました。フィンランドでは法律により、国籍にかかわらず、学習義務を規定するなど移民者などへの手厚い政策がとられていることを知り、日本との大きな差を感じました。 (Y.H)



おおさか子ども多文化センター 活動報告(2)

『多文化にふれる えほんのひろば 2018』

～出会ってわくわく! いろいろなおはなし、せかいのいろいろなおともだち～

(子どもゆめ基金助成活動)

11月17日(土)と18日(日)、西区の大阪市立中央図書館にて、標記イベントをおこないました。地域に住む外国から来た親子に母語の絵本を楽しんでもらうと同時に、身近な多文化の存在にふれてもらうというこの企画、開催は2年ぶり6回目です。会場には、日本語・外国語あわせてこれまでで最多の25言語、約750冊の絵本を展示し、両日でのべ1100人あまりの参加がありました。

恒例の「多言語おはなし会」では、5つの言語の外国人スタッフに、それぞれの母語で読み聞かせをしてもらいました。その中で、堺市の継承語教室に通う小学生たちは、ブラジル生まれの子はポルトガル語で、日本生まれのブラジルルーツの子たちは日本語で、ブラジルの子どもに人気の妖精の話を2言語で交互に読んでくれました。大勢のお客さんの前で緊張しながらも、落ち着いて最後まで朗読した彼らには、会場からひととき大きな拍手が送られ、それを見守るブラジル人ママたちの温かい笑顔も印象的でした。また2日目は、西アフリカの昔話を語るグループ“おはなし



の木”と、マリンバ奏者のジョゼフ・ンコシさんを招き、「おはなしと音楽で西アフリカを感じてみよう」も実施しました。アフリカの風景が目につく生き生きとした語りや音楽を聞いたあとは、子どもたち自身も太鼓やマラカスを手に演奏に参加、大盛り上がりの会場でした。



今回は、5つの高校から9人の外国ルーツの高校生がスタッフとして参加、フロアでの読み聞かせや文字指導で大活躍してくれました。こうして一緒に活動する中で、生徒同士が親しくなって連絡先を交換したり、日本の高校を卒業して現在は大学に通う外国人「先輩」スタッフから進

学や大学生活について話を聞く姿が見られたり、彼らにとってもこの「ひろば」が新しい出会いの場となっている様子を感じられました。また、自分たちの地域でも同様のイベントをしてみたいという他市の図書館関係者から相談を受けたり、外国につながる子どもが多数在籍する小学校の先生が「うちの学校でも『おおきなかぶ』の中国語版読み聞かせをやってみました」と声をかけてくれたり、この「多文化×絵本」の活動が、さまざまな広がりを見せていることも実感しました。

外国ルーツの子どもたちが母語を活かして活躍し、人とつながり、母文化を自信をもって発信する。そのような機会を、誰もが親しみやすい“絵本”というツールだからこそできる方法で、これからもつづけていきたいと思えます。(A. N)

『多文化にふれる えほんのひろば』に参加して――

(会場スタッフ 南雲陽子)



私は7年前の第1回目から、このイベントにボランティアとして関わっています。今回、特に印象に残ったのは、2日目に交流スタッフとして参加してくれた、外国にルーツのある高校生たちの活躍でした。絵本を手にした彼女らは、フロアの親子連れのところへ行き、一緒に読もうと声をかけていきました。さらにはフロアのあちこちで、自発的に「ミニ多言語おはなし会」をたくさんしてくれました。何人かの生徒が韓国語版やスペイン語版の『はらぺこあおむし』などを読み合っていると、「私も私も」と声が上がリ、どんどん増えていきました。初めは恥ずかしそうにしていた生徒も、いつのまにかマイクを握り、自分の母語でイキイキと読んでいました。私にとっても生徒たちから母国での有名な絵本を教えてもらい、楽しい発見がたくさんありました。また、違う高校、違う地域出身の生徒たちが、お互いの薦める絵本を読みあい交流していく姿に、絵本のもつ力を感じました。

「世界の文字を書いてみよう」のコーナーもずっと人が集い大人気でしたし、「こんにちはこの木」も親子連れが、各国の言語で「こんにちはこの木」が書かれた木の実を貼り付けたり裏返したりと楽しんでくれていました。また日本のお客さんも「この本ポルトガル語で読んでもらえますか？」と声をかけてくれたり、「図書館にこんなに外国の本があるなんて知らなかった」「図書館カードを作って今日から中国語の本を借りたいです」などと言ってくれた方もいました。

長年携わり、回を重ねるごとに感じるのは、外国語スタッフの皆さんの、自分の国の言葉を知ってもらいたい、文化を伝えたいという思いです。「○○語って優しい響きで発音がきれいですね」などと誰かに声をかけてもらえることが、どれだけその言語を話す人の力になることでしょうか。こういった場を通し、外国から来た人が自分を表現しそれを認め合う、そんな輪が広がっていくことを願います。



ふたつのグランプリ受賞！

2018年秋、オコタックにとって、うれしいニュースがふたつありました。オコタックの取り組み「地下鉄ボランティア」と「たぶんかじゅく アニモ」が、異なる企画に応募した結果、両方ともグランプリに輝きました。

地下鉄ボランティア『CSOアワード 2018』

オコタックの事業の一つ「府内高校生による訪日観光客への案内通訳ボランティア」は、11月17日(土)、認定NPO 法人大阪NPOセンターが主催する『CSOアワード 2018』でグランプリを受賞しました。

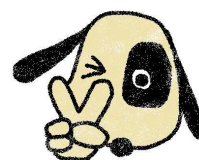
この賞はNPOなどの活動において「社会性」「組織力」「課題解決力」「波及効果」を選考基準として総合的に評価するというものです。4年目を迎える活動が以上の点で評価されたことは、誠にうれしいかぎりです。



今回は16団体のエントリーがあり、1次、2次の選考を経て残った5団体による最終選考でプレゼンテーション審査が行われ、グランプリをいただきました。他の団体も本当に素晴らしい活動をされており、どの団体がグランプリをとっても不思議ではない状況でした。そのようななかで、オコタックの活動が高く評価されましたが、高校生たちの素晴らしい活動が選考に大きく寄与したことは言うまでもありません。

さらに選考委員の講評では、民間企業である大阪メロとの協働を高く評価するというお話がありました。これは最終選考で大阪メロ側のボランティア受け入れの責任者が一緒にプレゼンの舞台に立ってくださったり、また他の管理職の方々も応援に来てくださったりと、このような大阪メロの姿勢も選考委員にはアピールしたのではないかと思います。当初の目的のひとつ「渡日生の可視化による社会的認知を高める」ということに、大いに寄与したと考えています。

なお、賞金としていただいた50万円は、オコタックの目標の一つである奨学金設立の際の基金など、外国につながる子どもへの支援の資金として活用したいと考えています。(Y.H)



たぶんかじゅく「アニモ」

『大阪西淀ライオンズクラブ 55周年記念事業「元気づくり応援事業」』

たぶんかじゅく「アニモ」は、大阪西淀ライオンズクラブ55周年記念事業「元気づくり応援事業」に応募し、第2次選考会11団体の中でグランプリを頂きました。活動している地元での受賞に、これも地域の方々のお陰だと喜んでます。

助成金は日本語・教科教材や通訳者へのお礼にと、大切に使用させていただきます。「アニモ」は、西淀川区内の外国人の方たちからの「子どもに勉強を教えて！」という切実な声に応じて2017年9月に、阪神なんば線福駅近くで営業していたブラジルレストランの一角をお借りして始めました。これは2013年から特定非営利活動法人多文化共生センター大阪が取り組んできた外国人家庭への生活支援事業の流れをくんでいます。昨年4月からは出来島駅近くのゆうせい薬局様のホールをお借りしオコタックの事業の一環として運営しています。ブラジル、ペルー、フィリピンルーツの中学生が、講師とほぼマンツーマンで、時にはスペイン語での支援も受けながら学習しています。(Y.T)





海外からのたよりをお届けします～

メキシコ便り④ 「グアテマラでピストル強盗に遭遇！」

(おおさかこども多文化センター会員・金野広美)

危険だといわれたエルサルバドルではなんの被害にもあわず、陸路でグアテマラ・シティーに戻りました。しかし、ここで油断は禁物です。グアテマラもなかなか危険なところなのです。長距離バスの発着場の付近では「ケチャップ強盗」といわれる物取りが跡をたないそうです。これはケチャップやソースをわざとかけ、「汚れているよ、荷物を持っていてあげるからふきなさい」と親切そうに近づき、荷物を受け取ると、そのまま逃走してしまうというものです。



また、複数で旅行しているからといって、安心してはだめで、泥棒も大人数でグルになっています。例えばカフェで友人と一息ついているところに、ひとりが時間を尋ねてきます。それとほぼ同時に「このお金、ここに落ちていたけど、あなたではないですか」と別のひとりが声をかけてきます。このようにほぼ同時に注意をひいた一瞬に荷物を奪う、という早業連携プレーであつという間に荷物が消えるのです。

情報としては治安の悪さは知っていましたので、気をつけながら、コロニアル時代に作られたという水道橋を探して歩いていた時、とうとう遭遇しました、ピストル強盗です。

このあたりは日本大使館などもあり、比較的安全だといわれている地域です。大きな道路はたくさんの車が走り、そばには公園がありサッカーに興じている人がいます。しかし、教えてもらった水道橋への道を曲がったとたん、急に通りは細くなり小さな木立があり、完全にまわりから死角になってしまう空間があつたのです。ひとりの若い男が「チナ(中国人)? ハポネサ(日本人)?」と声をかけてきました。グアテマラ人は観光客にはほとんど声をかけてくることがないので珍しいなと思いながら「ハポネサ」と答えると、「どこに行くの」と聞きながら近づき、じっと私のベルト式のかばんを見ています。これはやばいのではと思ったとたん、シャツの下に隠したピストルをちらっと見せたのです。「ひえー」私はびっくりして「とうとうおうてもた」と思ったのですが、「落ち着いて、落ち着いて」と自分に言い聞かせながら、「アクエドゥクト(水道橋)を探しているの、アクエドゥクトはどこ」と大きな声で言いました。すると男は「ノセ(知らない)」と行ってしまったのです。

「助かったー」私は一目散に男の反対側に走りました。ここでは水道橋はアクエドゥクトといわずにプエンテ(橋)というらしく、もし自分が知っている場所だったら、教えると言って道案内をしながら、すきを見てかばんを奪うつもりだったようですが、知らなかったため行ってしまったのでしょう。今考えるとあのピストルは本物ではなかったのかも知れませんが、まったく予想もしないところで会ってしまいました。比較的安全だといわれている場所でも突然死角になる場所は現れるし、世界中で安全な場所などどこにもないのだと思い知りました。

それにしても私はどこまで悪運が強いのでしょうか、われながら感心してしまいます。これで力を得た「天下無敵の大阪のおばちゃん」の旅はこれからも続きます。





『カリフォルニア州における言語的にマイノリティーな高校生への支援』(前)

大阪大学言語文化研究科 王一瓊

編集部より

アメリカではトランプ大統領が登場し、これまでの移民政策を根本から変更しようとしているかのように見え、メキシコ国境の「壁」建設に象徴されるようにセンセーショナルに「不法移民」への対策を打ち出しています。しかし、移民そのものはトランプ大統領であろうとも、否定できません。なぜならアメリカの経済的成長には移民の受け入れが必要で、現在も年間約 70 万人を受け入れています。

私たちは「壁」建設のような、ハデな面に目を奪われがちですが、一方で言語的にマイノリティーな子どもたちへの教育の現状はどうなっているのでしょうか。ちょうどこの時期に彼らへの支援活動について研究するため渡米された王さんに報告していただきました。王さんは 2016 年、オコタックにインターンシップで来られていた中国ネイティブの学生で、2回連載です。

.....

移民によって作り上げられた国家アメリカは、歴史的に多文化な人々が生活しているため起こる問題を多く抱えてきた。そんなアメリカの教育現場では、言語的にマイノリティーな生徒をいかに支援するかという課題に直面している。アメリカがこの課題をどのように解決してきたのか、言語的にマイノリティーである高校生に着目し、カリフォルニア州 X 市の 2 つの高校での調査からわかった現状とそこでの取り組みをまとめた。

1. ニューカマー教育に力を入れている公立高校 A 校

2013 年に初めて卒業生を送り出した新設校である A 校は、在籍生徒数が 300 人前後の非常に小さな学校で、X 市のダウントウンに位置している。学生の内訳は、ヒスパニック系の生徒が在籍者数の 60% を占めており、次にアジア系の生徒が全体の 20% を占める。それ以外では、パシフィック・アイランダーズ、白人の生徒も在籍しており、多様性に富む高校である。英語指導が必要な生徒(English Learners、以下 EL 生徒と呼ぶ)の割合が 90% 以上に達している(EL 生徒が必ずニューカマーとは言い切れない。アメリカ生まれであっても、家庭言語などの影響で、英語指導が必要とされる生徒が多い)。



公立高校 A 校

ここは EL 生徒が多数在籍しているため、手厚い支援を提供しているが、その中でも英語学習支援への評価は高い。生徒の英語学習と教科学習を

支援するために、A 校は After School Program(放課後プログラム)を提供している。このプログラムでは、ボランティアの教員による英語や教科授業指導、教員と生徒が協力して行う文化イベントなど幅広い活動が行われている。筆者が教科学習指導プログラムに参加した時は、20 人ぐらいの生徒が集まった。「生徒たちはバイトをしているから、当日のスケジュールによって、プログラムに来られたり、来られなかったりする」と教員が教えてくれた。

また生徒に加えて、ボランティアの教員の人的背景も多様であった。アメリカ生まれの人もいるが、イギリスやメキシコ出身の人もある。「生徒の言葉がわからなくて、どうしようと悩んでいたが、実際に生徒たちと接してみて、非常に慕ってくれた。可愛い生徒たちだったから、一緒に頑張れていると思う」とイギリス生まれで、つい最近、結婚でアメリカに移ってきたボランティアの方が話してくれた。

A 校は多彩で活気のある高校であるが、様々な課題にも直面している。たとえば A 校の欠席率は州平均よりはるかに高く、卒業率は州平均より低い。その原因のひとつが、生徒の貧困で、筆者が放課後プログラムに参加した際には、学校が提供する無料の夕食を食べている生徒を何人か見かけた。そんな A 校では低収入家庭の生徒は全体の 89% を占めているのが現状だ。このようにさまざまな課題はあるが、生徒の A 校に対する評価は高かった。「先生と生徒は、家族みたいだ。A 校が好きだ」と語っている生徒の笑顔が印象深かった。(つづく)



オコタックからのお知らせ

「高校生活オリエンテーション」 (大阪府教育庁主催)

日時： 2019年3月30日(土) 13:00~16:00

場所： 大阪府立今宮工科高等学校

対象者： 平成31年度大阪府立高校に入学する帰国・渡日生徒および保護者

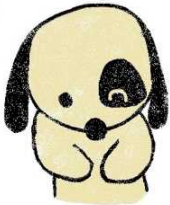
内容： 「学校のルール」「卒業後の進路」「学費」など、日本の高校生活で大切なこととお話しします。卒業生の体験談を聞くこともできます。保護者の方と一緒に参加してください。(通訳あり)



※入学する高校の先生を通じて申し込んでください。

問合せ先： 大阪府日本語教育支援センター(ピアにほんご) Tel 050-3513-1497

大阪府教育庁高等学校課 Tel 06-6491-0351



年賀状などの「書き損じはがき」、引き出しの奥に

眠っている「未使用の切手」をご寄付下さい。

当センターの活動を広く知っていただくために、『OKoTaC 通信』を各地の関係団体や公共施設などにも送付しております。そこで、これら広報活動にかかる通信費へのご支援をお願いいたしたく、今年も「書き損じはがき」等の寄付を募らせていただくことになりました。

- ・送っていただくはがき・切手は、「郵便局発行」の「使用していないもの(未投函のもの)」に限ります。
- ・書き損じたはがきも、未投函であれば寄付になります。
- ・普通のはがきだけでなく、年賀はがき・かもめーるなども対象です。
- ・はがきも切手も、未使用であれば、発行年や額面金額などに関係なく寄付となります。

※書き損じはがきのプライバシー保護につきましては十分留意いたしますが、

もしご心配であれば、お手数ですが住所などをマジックで消してお送り下さい。

なお、はがきは郵便局でまとめて溶解し再生紙の材料としています。



☆ご協力いただける方は、封筒などに入れて、当センター事務所(下記住所)までお送りください。

また、事務所にお寄りくださるときに、ご持参くださっても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

NPO 法人 おおさか子ども多文化センター 代表 濱名 猛志

〒550-0005 大阪市西区西本町 1-7-7 CE 西本町ビル 8階

Tel / Fax 06-6586-9477

E-mail osakakodomo@gmail.com

URL http://okotac.org

郵便振替 【記号・番号】00940-1-272824

(他金融機関からは【店名】〇九九(ゼキウキウ)

【店番】099【預金種目】当座【口座番号】0272824)

口座名義『NPO法人 おおさか子ども多文化センター』

(フリガナ: トクヒ) オオサカコドモタブンカセンター)

